

国境を越えるパブリック・ヒストリーは可能か？ ——豪日研究プロジェクトを通して考える——

田村恵子

はじめに

関西の女子大学で英文科を卒業した後、私は 1980 年にオーストラリアへ渡り、首都キャンベラにあるオーストラリア国立大学で文化人類学を学び始めた。社会と文化の変化に興味があり、修士論文ではアボリジニ女性と工芸産業をテーマにした。その後しばらく大学から離れたが、1993 年から博士論文の研究を始めた。対象は「戦争花嫁」と呼ばれるオーストラリア軍人と占領期から 1956 年にかけて結婚し、オーストラリアへ移住した日本女性で、彼女たちのアイデンティティーの変化を取り上げた。その調査を通して、国家、国境、国籍、そして戦争について考える機会を得た。

私は、1997 年に研究員としてオーストラリア戦争記念館に設立された豪日研究プロジェクト (Australia-Japan Research Project、以下 AJRP とする) で働き始め、2006 年 6 月までの足掛け 10 年間かかわってきた。この間に博士号を取得し、オーストラリア国立大学やオーストラリア国立図書館、そして最近神戸大学で自分のテーマの研究を続けてきたが、AJRP とのつながりも途切れなかった。この 10 年を振り返り、AJRP のスタートからその発展や変化の過程、そして研究員として経験したことや考えたことを記述してみたいと思う。この文では、歴史学の訓練をまったく受けていなかった私が、日豪の歴史、特に戦争の歴史と出会い、研究成果を日豪の人々に発信するためにどのような作業をしたのかを、具体的に述べたい。またオーストラリア戦争記念館 (以下戦争記念館とする) という、オーストラリアの一般国民や入館者に「歴史」を発信する場で仕事をした体験を通して、トランスナショナルな歴史とパブリック・ヒストリーの可能性について記述したい。なお、この文はあくまでも AJRP にかかわった一個人の

私感であることを断わっておきたい。⁽¹⁾

オーストラリアにとっての太平洋戦争と日本

私は1980年の渡豪以来、1980年代後半の3年間を除いてずっとキャンベラで生活してきた。日本の経済的成長の勢いが強かった時期に日本を出たこともあり、オーストラリアの生活では日本の立場や日本人であることに引け目を持つことはほとんどなかった。大学在学中に1年間留学したアメリカの中西部と比べると、オーストラリアやオーストラリア人は素朴だと感じ、その純朴さに好感を持ちながらも、日本のほうがより洗練されているという密かな優越感を抱いていたと思う。1980年代中ごろから、日本語を学ぶ学生の数が増し日本語学習ブームが起こったが、それはオーストラリア人の親日感情の現われだと信じていた。確かに親日感情は存在するが、それだけではないと、後日知ることになる。

博士論文のテーマに日本人戦争花嫁のアイデンティティーの変遷を選び、日本人女性とオーストラリア人軍人の出会いの歴史的背景を明らかにするために、オーストラリア軍の日本占領政策とその実態を調査した。その過程で、オーストラリアが20世紀の初頭から積極的な白豪主義を実施し、白人以外の移民の入国を拒んでいたこと、太平洋戦争では、日本や日本人に関する人種差別的なプロパガンダ活動がオーストラリア国内でなされてきたことがわかった。さらに、占領期にはオーストラリア軍は英連邦軍の一員として、呉を中心に駐留したが、オーストラリア兵が日本人女性と恋愛し、そして結婚の可能性が出てきた際には、それを軍当局が許可しなかった。しかしこのような反日感情は、白豪主義の影響と、元敵国への反感で、それは前時代的なものだと私は考えていた。白豪主義が正式に廃止され、アジア人への差別感も次第に弱まり、さらにその中でも日本人は一種の「名誉白人」のような立場で、オーストラリア人からは特に優遇されているはずだ、と考えていたと思う。

そのような私のオーストラリア観がくずれたのは、終戦50周年の1995年で、終戦を祝う各種行事が行われていた頃である。ちょうどこの時期のオーストラリアは、当時のキーティング首相を主唱者とするオーストラリアの「自分探し」の時期だったと言える。つまり、それまでイギリスやアメリカへの帰属感が強かった時代から、アジアとのつながりに目が向けられていた時期だった。これに関連して、オーストラリアの戦争認識に、太平洋戦争での自国防衛戦の

(1) 豪日研究プロジェクトのホームページアドレスは www.awm.gov.au/ajrp である。AJRPの詳細については Steven Bullard, "The Australia-Japan Research Project", in Steven Bullard and Keiko Tamura eds, *From a hostile shore: Australia and Japan at war in New Guinea* (邦題『過酷なる岸辺から: オーストラリアと日本のニューギニア戦』), Canberra: The Australian War Memorial, 2004 を参照のこと。この論文はインターネット上、下記のアドレスでも読むことができる。 [http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/WebI/Chapters/\\$file/Introduction.pdf?OpenElement](http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/ajrp2.nsf/WebI/Chapters/$file/Introduction.pdf?OpenElement) また、AJRPは2冊の図書も出版している。両書とも日英2ヶ国語で書かれており、詳細は以下のとおりである。Bullard and Tamura eds., *From a hostile shore*; Steven Bullard, *Blankets on the wire: The Cowra breakout and its aftermath* (邦題『鉄条網にかかる毛布: カウラ捕虜収容所脱走事件とその後』), translated by Keiko Tamura, Canberra: Australian War Memorial, 2006.

重要性を喚起しようという動きが始まった時期だった。

この50周年記念行事のクライマックスは、8月15日の夜に戦争記念館前で催されたVP Day (Victory in the Pacific Day) 記念祝賀ダンスパーティーだった。Victory in the Pacific、つまり「太平洋での勝利」とはオーストラリアの勝利であり、言うまでもなく日本の敗北だ。このパーティーの宣伝を新聞で見たときのショックはまだ記憶に残っている。終戦記念日に日本で催される追悼式は、「しめやかに」行われる式典である。しかし、このパーティーでは人々が飲んだり歌ったりしながら、オーストラリアの勝利、そして日本の敗北を祝うのだ。平和の喜びを祝うのが本質的な理由だろうが、やはり日本人として日本の敗北をダンスパーティーで祝われていると思うと面白くなかった。そしてオーストラリア人は親日家ばかりではないとようやく気がついた。

戦争記念館には、渡豪まもない1980年頃から、観光ガイドとして訪れていた。1980年代は、キャンベラ観光がオーストラリア旅行に組み込まれていた時期で、見学コースには戦争記念館での約1時間が含まれていた。その際日本人ガイドは、あくまでも日本側に心情を移入して戦争を語るのだった。つまり、日本兵の勇敢さを称え、ニューギニア戦の悲惨さ嘆き、寄せ書きをした日の丸や千人針の前では、中高年者には懐かしさをそそり、若者には知識の受け売りをしてきた。このように戦争記念館を数え切れないくらい訪問し、観光客に対して戦争の話をしてきたにもかかわらず、1995年の祝賀パーティーで、オーストラリア人が日本の敗北を喜び祝うことを、私は素直に受け入れられなかった。

太平洋戦争の記憶の非対称性

第二次世界大戦において、オーストラリアはヨーロッパ戦線と太平洋戦線で戦った。しかし、オーストラリア本土が直接攻撃を受け、「侵略の危機」にさらされたと考えられている太平洋戦争は、オーストラリアと日本の間で戦われた戦争である⁽²⁾。この戦争の記憶は、日本軍占領下の捕虜の体験と密接につながっている。1942年2月にシンガポールの連合軍が降伏し捕虜になった15,000人近くの兵を含めて、東南アジア方面で日本軍の捕虜になったオーストラリア兵の総数は22,000人である。その3分の1の約8,000人が死亡し、この数は太平洋戦争でのオーストラリア軍戦死者数のほぼ半分に相当する⁽³⁾。捕虜たちの収容所や強制労働での過酷な体験は、シンガポールのチャンギ捕虜収容所やタイビルマ鉄道という固有名詞とともにオーストラリア人の太平洋戦争の記憶に刻まれている。

加えて近年注目を浴びているのが、ココダ・トラックと呼ばれるニューギニアの北部海岸と南に位置するポートモレスビーをつなぎ、山岳部ジャングルの中を通るルート沿いで、日本

(2) Peter Stanley は “‘He’s (not) coming south’: the invasion that wasn’t” in Bullard and Tamura eds, *From a hostile shore* のなかで日本にオーストラリア侵略の意図はなかったと論じている。

(3) Hank Nelson, *Prisoners of war: Australians under Nippon*, Crows Nest, NSW: Australian Broadcasting Corporation, 1985, p. 4.

陸軍とオーストラリア陸軍の激しい戦闘である。1942年7月、日本軍はニューギニアの北海岸のゴナに上陸し、オーエンスタンレー山脈を越えて南海岸にあるポートモレスビーにかけて進攻を始めた。オーストラリア軍は南下する日本軍を迎え撃つため、ポートモレスビーから北へと出発し、ココダ周辺のジャングルに覆われた険しい山岳地帯での激しい戦闘の結果、オーストラリア軍が日本軍の進攻を食い止め退却させたとされている。この戦闘は「ココダの戦い」と呼ばれ、近年ココダ戦関係書籍の出版ブームとなった。⁽⁴⁾

一方日本では、太平洋戦争においてオーストラリアの占める位置はそれほど大きく認識されていない。太平洋戦争は、日本対連合軍の戦いとされているものの、連合軍とはつまりアメリカ軍であるという見方が強く、太平洋を挟んで南側に位置するオーストラリアとのかかわりについて知る人は多くない。1942年のダーウィンをはじめとするオーストラリア北部地域の爆撃や、シドニー湾での特殊潜航艇の攻撃など、日本軍がオーストラリアを直接攻撃したことを知る人はより少ないだろう。以上のように、太平洋戦争の日豪間の記憶には非対称性が存在するといえる。⁽⁵⁾

この非対称性の存在を日豪双方とも意識していたものの、それを積極的に解決しようという作業は長年なされていなかった。従来軍事史研究は、自国軍の戦略や戦闘の記述や分析が主であり、対戦相手の戦術や動きはあくまでも自国のそれと関連があった時のみに関心が示される。そのため、戦略的目的以外に、あえて敵国軍人の体験に目が向けられることが少なかった。しかし同時に、オーストラリアでは、特に日本軍による捕虜の取り扱いや戦闘に関して、自国がこれほど重要視している体験について日本人の知識や関心が低いことを批判する動きがあった。

豪日研究プロジェクトのスタート

豪日研究プロジェクト(AJRP)は、1994年8月に当時の村山富市首相が発表した、戦後50周年を記念しての平和友好交流事業の一環として、1997年にスタートした。平和友好交流事業は日本国内外で展開され、日本国内ではこれをきっかけにしてアジア歴史資料センターが設立された。この基金事業の一環として、日本国外務省が、オランダ、英国、ニュージーランド、そしてオーストラリアなど、第二次世界大戦で日本の対戦国だった国々の研究機関に助成金を支給し、歴史研究や交換プログラムを支援することになった。この助成金の用途はそれぞれの国によって違い、たとえば英国では日英共同の研究グループが形成され、日英関係をテーマと

(4) 2003年から2004年にかけてココダ戦に関して出版された主な書籍は、Stuart Braga, *Kokoda Commander: A Life of Major-General 'Tubby' Allen*, Melbourne: Oxford University Press, 2004; Peter Brune, *A Bastard of a Place: The Australians in Papua Kokoda, Milne Bay, Gona, Buna, Sananada*, Sydney: Allen and Unwin, 2003; Peter FitzSimons, *Kokoda*, Sydney: Hodder, 2004; Paul Ham, *Kokoda*, Sydney: HarperCollins, 2004 などがある。

(5) この太平洋戦争の記憶の非対称性に関して、筆者が鎌田真弓、加藤めぐみ、飯笹佐代子と行っている共同研究の中間報告は、『オーストラリア研究』第19号(2006年)に掲載されている。

した論文集シリーズが刊行された⁽⁶⁾。

オーストラリアでは、1996年に日本大使館が戦争記念館に対して、日本とオーストラリアの戦争の歴史に取り組むプロジェクトを設置してはどうか、と申し入れた。それまで太平洋戦争に関して、日豪の共同プロジェクトが存在しなかった状況を考えると、この提案は画期的なものだった。日本大使館と戦争記念館双方にとっての課題は、まずプロジェクトの内容を煮詰めることであり、そして研究成果の発表媒体を決めることだった。前者の決定は1997年3月にキャンベラで開かれた計画会議まで待つことになるのだが、後者へのオーストラリア側の提案は、従来の論文集などの図書出版という形を取らず、研究成果の公開を当時普及し始めていたインターネットを使うというものだった。その理由は第一に、ブラウザを使えば全世界からサイトにアクセスができ、研究成果の広い伝播が可能であること、第二には、インターネット上に研究成果を発表した後も、情報の追加や修正が可能であること。そして第三には、図書の出版と比較するとコストが低いことなどが挙げられた。

AJRPは、その誕生時よりトランスナショナルであるという必要条件を課されていた。つまりプロジェクトは、戦争記念館というオーストラリアのために戦い死亡した戦没者を記念するという、非常にナショナルな目的のために存在する国立機関の中に設置され、その運営費用は日本政府が負担する組み合わせだった。同時に、日本大使館と戦争記念館の双方の懸念は、日本政府から助成を受け取ることで、戦争記念館が日本寄りの研究をすると見られないかという点だった。そのような批判は双方にとって好ましいものではなかった。日豪の戦争の歴史の中には、いろいろな課題が残り、捕虜の取り扱い問題や、連合軍による戦争犯罪裁判など感情的な面で解決がされていないものも多い。これらの問題を研究課題とすること自体が政治的に解釈される可能性があり、できるだけ中立で学術的な研究課題を選択しようという動きがあった。

戦争記念館と日本軍関連資料

戦争記念館は、オーストラリア人戦死者60,000人以上という悲惨な結果を出した第一次世界大戦の歴史と記憶を記録するために、元ジャーナリストで後に軍事史研究者となり、第一次世界大戦の膨大な公刊戦史を執筆したC. E. W. ビーンが中心になって設立し、1941年に開館した国立の機関である。戦争記念館は戦没者追悼施設、博物館、そして美術館の三つの機能を持つ建物で、現在の館内の展示の一部には最新の音響映像機器が取り入れられ、若い世代もひきつけられるようにできるように工夫されている。近年は、オーストラリア国内観光教育施設の中では入館者数をもっとも多く、3年連続で(2001-2003年)オーストラリア観光施設最優秀賞を受賞した実績がある。記念館は現在、退役軍人省の管轄下であり、記念館理事会のメンバーには必ず退役軍人会の代表が加わり、内部の決定には現役・退役の軍人の影響力が強いと考え

(6) 全5巻からなる論文集は、細谷千博とイアン・ニッシュの監修により日英2ヶ国語で出版されている。英語シリーズ名は*The History of Anglo-Japanese Relations, 1600-2000*, Palgrave Macmillan, 2002-2003。日本語シリーズ名は『日英交流史』東京大学出版会刊、2000-2001年。

られている。

戦争記念館では、AJRP がスタートするまで、日本に関連した研究はまったくなされていなかった。しかし、戦争記念館には数多くの日本軍の資料が保存、展示されていた。その中でも一番大型で有名なのは、日本海軍の特殊潜航艇で、1942年5月に、シドニー湾に停泊していたアメリカ海軍巡洋艦に対して魚雷攻撃をした。湾内で沈められた1艇と湾に進入時に防潜網に引っかかり自爆したもう1艇が攻撃の後に引き上げられた。この2艇の原型をとどめている部分をつなぎ合わせて復元したものが、主要展示物として人気を集めている。そのほかにゼロ型戦闘機や、太平洋戦争関連の展示室には多くの日本軍関連の資料が展示されている。

一方、戦争記念館が1954年以来所蔵していた日本関連文書資料に、日本軍捕獲資料があった。それはAWM82とコレクション名がつけられ、館内のリサーチセンター内に保存されていた。この資料の内容は、二つのカテゴリーにわけられる。まず第一は、太平洋戦争中に日本軍がニューギニア戦線で退却する際に廃棄し、その後連合軍によって回収された軍関係文書であり、第二は、ラバウルの日本軍将兵100,000人が降伏後、オーストラリア軍の監督下に置かれ、その後本国送還になるまでの時期に、日本軍とオーストラリア軍の間で交わされた文書や日本軍内部通知文書である⁽⁷⁾。

AWM82コレクションは、30年間近くその存在が忘れられていたが、1982年に桑田悦氏がキャンベラを訪問し、第一の部分の資料を調査し目録を作成した⁽⁸⁾。この調査の結果、資料の中に数多くの軍人手帳や軍事郵便通帳が含まれていることがわかった。桑田氏は日本の厚生省に働きかけ、手帳や通帳の持ち主の遺族を探し出し、それを遺品として返還できるように運動した。日本政府の返還要請に対して、戦争記念館側も遺族に返すことに同意した。さらに1995年以降、防衛大学の田中宏巳教授によって、ラバウル関係の資料を含むコレクション全体の目録作成作業が始まっていた⁽⁹⁾。

データベース作成作業の開始

AJRP は1997年3月に日豪の歴史や戦史研究者を招いて国際会議を開催し、プロジェクトの可能性と方向性を探った。前述したように、戦争というテーマを扱いながら、日豪どちらの国の立場も擁護せず、また非難しないような作業を、初期の段階でする必要があった。そのため、研究課題は客観的で学術的なものを選ぶべきだ、という意見が出た。まずAJRPが取り掛かったのは、前述のAWM82コレクションのデータベース化だった。この作業は、主観や解釈を含まない作業である。さらに、目録制作作業を始めていた田中宏巳教授の協力も得られた。一点

(7) AWM82コレクションの歴史や資料内容解説は、田中宏巳「解説」、田中宏巳編『オーストラリア国立戦争記念館所蔵旧陸海軍資料目録』緑陰書房、2000年を参照。

(8) 桑田悦「オーストラリア戦争記念館で保管中の日本軍文書について(1)」『軍事史学』第18巻3号(1982年)、及び「オーストラリア戦争記念館で保管中の日本軍文書について(2)」『軍事史学』第18巻4号(1983年)。

(9) この文献目録は、田中編、前掲書として出版されている。

一点の資料に関しての資料記録を作成し、それにキーワードや年代、地域などのデータと要約を入力する作業である。日英両言語に堪能なスタッフによる、時間と労力を必要とする作業だった。

そこでプロジェクトが直面した問題は、インターネット上での英語と日本語の相互表記だった。このようにトランスナショナルな研究成果を発表するためには、まず技術的な問題を解決する必要があったのである。当時はデータベース用のソフトウェアの数はまだ少なかった上、オーストラリアの英語システムを使って日本語を表記し、さらに、検索機能を有効にするためにどうしたらいいかを、手探りで進めなくてはならなかった。幸い、このような技術的な問題点は克服され、現在では AJRP のデータベースをインターネット上で見ることも、検索することもできる。しかし、やはり完全なバイリンガルとは言えず、データベースを使いこなすためには英語を使用するという条件がついている。ただ、検索された文献の日本語表題や関係者氏名がウェブ上で日本語表記されているので、日本語を読める利用者にとっては助けになる。

AWM82 コレクションのデータベース作業が完了した後は、戦争記念館内の日本語諸資料や日本にある対豪戦・占領関連資料の紹介とデータベース化が主要となった。この時期の成果は、日英両言語の学術的情報をオーストラリアからインターネット上に発信するというパイオニア的なものであり、同時にデータベースの内容も非常に密度の高いものであった。しかし後から振り返ると、想定利用者を研究者というグループに限ってしまったようにも思う。確かに、AWM82 コレクションは歴史的には貴重な資料であるが、幅広い関心をひきつけられるような資料とは言いがたかった。

AJRP セミナーとワークショップ

AJRP はデータベース作業と平行して、日豪の軍事史や歴史研究者を集めてのセミナーも開催した。学術的な研究発表と意見の交換を実現するために、まず日本でオーストラリアと接点のある研究をしている研究者を探し出すことから始まった。秦郁彦氏などの著名な研究者が、特別ゲストとしてオーストラリアの学会に招聘されて発表をしていた場合があったが、それ以外の日本人軍事史研究者がオーストラリアで発表をすることはほとんどなかった。さらに、発表を理解し意見交換をするには、言葉の問題を解決しなくてはならない。ゆえに、セミナーやワークショップのテーマ選び、人選、そして言葉の問題など、解決しなくてはいけない問題が山積みだった。

AJRP 主催のセミナーで、非常に印象に残った出来事があった。それは 2000 年 10 月にオーストラリア国立大学で開催された、「ニューギニアの戦争とその記憶」をテーマにしたセミナーだった。⁽¹⁰⁾ このセミナーでは、オーストラリア人研究者マーク・ジョンストンが、ニューギニア

(10) このセミナーの参加者及び発表論文は <http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/remember.nsf/pages/NT00002B0E> を参照のこと。

で戦ったオーストラリア人兵士の日本人観を、兵士の日記や手紙をもとに「しかし、彼らも同じ人間だ——オーストラリア兵の日本兵観」と題して発表した。このようなセミナーでは、ともすれば相手国からの参加者に気を使い、発表者は自国の作戦や戦闘についての報告や分析が中心で、相手国について言及する際は、「双方ともよく戦った。あっばれだった」と互いの肩をたたきあいながら、より友好関係を深めていくような発表が多くなりがちである。

しかしジョンストンの発表は、オーストラリア兵が日本兵に対して人種差別意識や軽蔑感、そして強烈な憎悪感を抱いていたことを、兵士たちの手紙や日記から実証した。彼の発表の内容は詳細で非常に説得力があり、資料の扱いも客観的であったが、そこに描かれたオーストラリア兵の日本人差別観は、赤裸々でショッキングなものであった。彼の口頭発表が終わったあと、しばらく沈黙が流れた。オーストラリア人参加者は、そこに同席する日本人出席者が今の発表をどう受け取ったか心配していたようである。その気まずい雰囲気のを和らげるため、私は「今の発表は、戦争の底にある人種間の偏見や憎悪を真正面から取り上げたすばらしい発表だったと思う」という感想を述べたのを憶えている。それがきっかけになって、緊迫した雰囲気が緩み、活発なディスカッションが始まった。ジョンストンはその後も日本人の反応が心配だったようで、2003年にキャンベラで開かれたオーストラリア陸軍歴史学会で同じテーマで発表する際にも、日本から学会に出席した日本人軍事史研究者の反応が心配だと私に漏らしていた。もちろん、彼の発表は資料に基づいたものであるが、オーストラリア兵の実態を日本人を前にして発表するには勇気がいる。

このように戦場での兵士の戦争体験を取り上げる際には、底に潜む敵に対しての人種差別意識や憎悪感を避けることはできない。しかし、その内容が非常に厳しいものであればあるほど、発表者だけではなく、発表を聞く側や論文を読む側の姿勢が重要になる。トランスナショナルな歴史は、研究するものと、その研究成果を受け入れるものの双方に、冷静で客観的な姿勢を求めるのではないだろうか。

プロジェクトの変化と発展

豪日研究プロジェクトの作業内容は、2000年くらいから変化し始め、データベース作成から、戦争における人々の経験の検証へと移っていった。戦争という国家間の争いと、殺すか殺されるかの戦闘状況下で、さらに病気や飢餓（日本兵の場合）に苦しんだ両国の兵士の経験にどのような共通点や相違点があるかという検証である。さらに戦闘要員だけではなく、生活の場に戦争がやってきたニューギニアの人々や、日豪の民間人も含めた体験をも包括しようとした。同時に、研究成果の発表対象も、研究者から、もっと広い日豪両国の一般の人々へと広がっていった。この変化の背景は、データベース作成作業やセミナーを通して、いかに戦争の歴史が国家という枠組みにとらわれて研究され、語られてきたかがはっきりとしてきたことにある。国が発行する公刊戦史や従来の軍事史研究には、自国の軍の作戦や戦闘結果、そして自国の将兵の動きは詳細に記述されている反面、そこには対戦相手の姿はまったくといっていいほど見

えてこない。戦争では、当然のことながら、敵と味方、自国と敵国にはっきりと線引きがなされているのだ。

では日豪の双方を調査し、その体験の共通性と相違性を検証するためにはどうしたらいいのか。それには二つの方法が考えられた。第一は、それぞれの国の研究者が自国の体験をまずまとめ、それをセミナーに持ち寄り比較研究するという方法であり、AJRPではセミナー開催をとおして、日豪の研究者たちが言葉の壁を乗り越えて、研究発表とディスカッションができるように努力してきた。第二は、日豪両方の資料を1人の研究者が検討し、その研究結果をまとめるという方法である。そこで、研究員として長年プロジェクトに携わってきたスティーブ・ブロードと私が中心になり、他の軍事史研究者の助けを借りて、AJRP独自で資料検討や論文の執筆をすることになった。この作業の割合が2000年以降に次第に増えてきた背景は、プロジェクト研究員自身が、日本とオーストラリアの戦争史の両面を研究し、まとめる実力と自信が出てきたからかもしれない。

戦争における個人体験の比較は、2000年にトヨタ財団の助成金を受けて実施した「ニューギニアとその記憶」プロジェクトで行われた。ここでは、ニューギニア戦での日豪そしてパプアニューギニアの人々の戦争体験の研究が、数多くの日豪米の研究者の協力を得て展開された。本研究は、日豪だけではなく、戦場となったパプアニューギニアの人々の体験も視野に入れるという意欲的なもので、この研究成果は、インターネット上で日英の2言語で発表されている。⁽¹¹⁾

田村義一日記

その後、さらにより深くオーストラリア人と日本人のお互いの認識を検討するという目的で、2001年から2002年にかけて「ニューギニアで戦う敵をどのように見ていたか」というテーマのサイトを立ち上げた。そこでは、オーストラリア人の持っていた日本人観の変化を戦争前、戦争中そして戦後のインタビュー記録などを使って掘り下げ、同時に日本人による戦争体験記録を載せている。このテーマの研究調査作業の最中に、私はある日本兵の日記と出会った。

2001年のある日、AJRP宛にメルボルン在住のジェフ・クリップス氏から問い合わせがあった。彼の友人が古い手帳を保管しているが、日本語で書かれていると思うので、内容を確認してほしいというメールだった。そこに添付されていたのは、日記の1ページだった。なめらかな筆跡のペン字を読むと、「極楽鳥」「南方」「ニューギニア」などと言う単語が目飛び込んできた。どうやら、ニューギニアに到着したばかりの日本兵が、それまで一度も見たことがない自然や風景に対する印象を記録したものらしい。早速返事で、これはおそらく日本兵がニューギニアで書いた日記で、是非全体を見せたいとお願いしたところ、クリップ氏はキャンベラに所用がある際に、わざわざこの日記の全ページコピーを持ってきてくださった。

(11) <http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/remember.nsf/>

この日記は、ビクトリア州出身の元オーストラリア人兵士アラン・コネル氏が戦争中に入手したもののだが、彼は1941年10月に19歳でオーストラリア陸軍に入隊し、ニューギニアへ派遣されている。この日記の由来に関して、彼は一言も家族に語ることなく亡くなり、コネル氏の死後は未亡人が日記を保管していた。そして未亡人も亡くなった後、両親の遺品を整理していた家族が日記を見つけた。家族は、この古ぼけた小さな手帳がいったい何なのかかわからず廃棄しかけたが、思いとどまり、近所に住むクリップス氏に相談したのだった。中学校長を退職したばかりのクリップス氏は、好奇心をかき立てられ、コンピューターで豪日研究プロジェクトのサイトを検索し、照会のメールを打った。この日記は捨てられても不思議ではない状況を何度もくぐり抜け、60年経ってようやくその存在が明らかになり、内容が理解された。偶然だけでは済ませない、何か運命的なものを感じるのは、私だけであろうか。

日記全体を読むと、これは第41師団歩兵第239連隊（東都第36部隊）に所属していた田村義一という一等兵のものだと推察された。彼はニューギニアの北部のウエワクに1943年2月に上陸し、主に飛行場の建設作業に携っていた日常生活の様子を描写している。この日記の素晴らしさは、ニューギニアのジャングルでテント生活をしながら、日々の厳しい作業や、夜間の連合軍による爆撃、そして奥地への輸送移動の際に、田村が感じたことや考えたこと、そして苦悩したことが、素直に生き活きと、散文と短歌で表現されている点である。そこには、故郷を遠く離れ、戦場に送られた1人の日本人兵士のありのままの姿が、浮かび上がってくる。オーストラリア人の抱く、「天皇バンザイ」と叫び死んでいった無表情な日本兵というステレオタイプでしか形容されない日本人兵士像を、田村の日記の内容を英文で紹介することで、変えることができるのではないかと考えた。そこで、私は田村の所属部隊の動きを他の資料を使って調査し、さらに彼の日記文を抜粋し英訳して、解説文を書き加えた。そして、これらはAJRPのウェブサイトに掲載された⁽¹²⁾。調査と翻訳が終わり、インターネット上に発表した時点で、アラン・コネル氏のご子息ジェフ・コネル氏に、この日記の原本を戦争記念館へ寄贈していただけないか、と持ちかけた。家族にとっては亡父の形見の品ではあるが、歴史的資料として、戦争記念館で永久保存するのがふさわしいと考えたからである。この要請をご子息は快く受け入れ、寄贈手続きは無事に終了した。

それから1年ほどして、AJRPにNHKと時事通信社から相次いで個別に連絡が入った。NHKは2004年の終戦記念日特別番組を制作するため、日本兵の残した手紙を探しており、私は田村義一日記の存在を紹介した。時事通信社は、AJRPのホームページで田村日記について知り、取材を申し込んできた。さらに、両機関とも田村義一の遺族を探し出したいと希望した。遺族は意外なほど簡単に見つかった。実弟の田村貞宣氏が栃木県小山市で健在だったのだ。

田村貞宣氏は、兄の日記がオーストラリアで見つかったのは、「まさに晴天の霹靂とはこのことだと痛感した」と記している⁽¹³⁾。義一氏の妹2人も健在だった。義一氏の戦死公報には「1944

(12) この日記はAJRPのサイトで読むことができる。

(13) 田村貞宣「兄還る」、石崎千恵子編『従軍手帳に書残した最後の日記——南海の孤島に散った田村義一の手記』、自費出版本、2005年刊。

年3月ニューギニアのピリアウにて戦死」と記されていたが、詳しいことはわかっていなかった。近親者の願いは、その日記を一目見たい、そして手に取りたいというものだった。しかし3人とも高齢で、オーストラリアまで旅することは到底できない。貞宣氏は兄の戦死後、実家の農業を継ぎ、義一氏が生まれ育った家を守って暮らしており、義一氏の生家の建物もまだ残っていた。その生家にある仏壇に手帳が戻ってくれば、兄の魂が帰ってくるのと同じだというのが、遺族の気持ちであったに違いない。

しかし、この願いを実現するためには、すでにコネル氏が戦争記念館に寄贈し、オーストラリアの国の所有物になっている日記を、個人に譲り渡すという手続きが必要だった。AJRPは、遺族の気持ちを酌んで返還のために後押しをした。手帳は歴史資料として貴重ではあるが、書かれている内容は複写でも残せること。また内容は軍事機密に触れるものではなく、将来の研究にとっても複写で十分であることなどを戦争記念館関係者に提言した。日本大使館からの働きかけもあり、戦争記念館内では60年ぶりに見つかった唯一の遺品である手帳を、遺族に返還することへの強い反対はなかった。また前述のように、1980年代に桑田氏の努力下、軍隊手帳や通帳が遺品として日本の遺族に返還された前例があったことも助けになった。2003年12月に戦争記念館で行われた返還式典において、ガウワー戦争記念館館長から当時の駐豪日本大使大島賢三大使（現国連大使）に日記が手渡され、そして外務省の仲介で遺族の手に戻った。

私は返還された翌年の春に日本を訪れた際、ご遺族にお目にかかり義一氏の墓参をするため栃木へ出向いた。義一氏の日記の中に、故郷の春の景色とニューギニア風景を比べ、故郷を懐かしむ記述があるが、訪問した時期がちょうど桜の咲き始めた頃で、義一氏が心からいとおしんだ野山の風景を自分の目で見るのができたのは本当に幸いだった。また、遺族との対面で、この日記がどれほど大切なものであるかを実感でき、手帳の返還を心から喜ぶことができた。

おわりに

1997年から2006年まで、AJRPの研究員として、数少ない日本人職員の1人として戦争記念館で勤務し、太平洋戦争と日豪関係について調査研究し、インターネットでその研究成果を伝播するという貴重な機会を与えられた。その中で感じたのは、戦争記念館で仕事をするパブリック・ヒストリアンの1人としての、一般の人々との密接なかかわりである。戦争記念館が入館者で毎日賑わい、多くの人々が展示場を見学しているのを見ると、歴史情報を発信することの重要性がひしひしと伝わってくる。展示室では、発信者側と受信者の距離は至近距離といってもいいほど、ガラスを1枚隔てているだけである。同様に、AJRPはインターネット上で研究成果を発表し、情報はコンピューターのスクリーン上まで送られ、発信者と受信者の距離は展示室と同じくらいの距離まで近くなった。またインターネットは、国境や地理的距離に制限されることなく、全世界へ情報を発信できる。このように、インターネットはパブリック・ヒストリアンにとって非常に有効な道具である。さらにインターネットを使うことで、展示室で

は表現できないような複雑な情報を受信者に提供できる。

AJRP のねらいは、太平洋戦争の歴史を日豪両国の人々により深く理解してもらうことである。そのため、戦争中での両国の兵士や民間人、そして戦争に巻き込まれたパプアニューギニア住民の体験や認識を掘り起し、書き記すところにある。そしてそれを紹介する際には、人々の理解を助けるために、言語を翻訳し、その背景にある文化について解説する必要がある。AJRP がインターネットのウェブを通して発信してきたデータベースや研究成果が、はたしてどれだけ日豪間の相互理解に貢献したのかを測定するのは困難であるが、資料目録データベースや各種テーマのサイトを通して、多様なコンテンツを提供することができたと確信している。

田村義一日記にまつわる一連の出来事は、偶然性と必然性が交錯した出来事だったといえる。しかし、60年間もオーストラリアに眠っていた日本人兵の手帳の存在と内容を AJRP のホームページ上で公表し、そして手帳が遺族のもとに返還される助力ができたことは、パブリック・ヒストリアンの1人として感慨が深い。同時に、戦場で消えていった1人の兵士の生き方や悩みを両国の人々に紹介することによって、戦争という過酷な状況におかれた人間の真の姿を垣間見て、人間性への共感を呼び起こせるのではなかろうか。国境を越えたパブリック・ヒストリーの目標は、この共感の創生にあるのではないかと考える。